

「ルカノール伯爵」 (2)

ドン・ファン・マヌエル
木原 太源 訳

第十一話 「トレードの大魔術師ドン・イリ

ヤンとサンティアゴ(14)の司祭に
起った事について」

またある時、ルカノール伯爵はパトローニオと話をしておられたが、それはこのような話題についてであった。

「パトローニオ、あるお方が参られて、さる事に予の力添が必要なので是非にと懇請され、その代りに予の為には何なりとやる覚悟であると確約された。そこで予は惜しみなく尽力致したところ、そのお方は事がいまだ成就しておらぬのにすでに成ったと判断された。折しも約束を果してもらえればこの上もなく有難い事が予に持ち上がりその履行を求めたところ、そのお方は口実を設けて拒否された。続いて生じた事にも同じ言葉が

返って参った。その後も予が求めた約束の履行には悉く断の返辞が繰り返された。ところが予の助力を必要とする事はいまだ達成しておらず、予が援助を打ち切れば全うすることはない。そこで予は信頼して止まぬお前とその叡智を頼み、この件に関する予の身の振方を助言してくれるように頼む。」

「伯爵様」とパトローニオは返答した。「この件に関しまして殿が対処なさるべく手だてを講じられますには、トレードに住む大魔術師ドン・イリヤンとサンティアゴの司祭に起きた事をお聴きいただけますれば幸でございます。」

そこで伯爵は、それがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「サンティアゴに魔術の修得を切望致しております司祭がございました。トレードのドン・イリヤンは当代随一の魔術師であるとの評判を聞き及びましたので、わざわざ遠方にある彼の地へと赴いたのでございます。さて、トレードにやって参りますとすぐさまドン・イリヤンの邸を訪れました。その時彼は随分離れた大広間で読書中ではございましたが、訪問者を丁寧に迎え入れますと、「食事を済まされる迄はお訪ねになられた理由は仰らないで下さい」と告げたのでございます。そして何くれとなく気を配り、心地良い部屋と必要な物を総て提供しては、司祭の来訪を心から歓迎している旨を覚らせました。さて食事を終えて二人だけになりますと早速司祭は訪れた理由を述べたのでございま

す。「魔術を是非とも学びたく、御教授願いたい」と口を極めて懇請致しました。するとドン・イリヤンの返辞はこうでございました。「貴方は司祭であり、御身分のあるお方でございませうから、何れ高位にお着きになられるであります。位階を登る者は己の野心の目的を遂げると、それが他人のお膳立と尽力の賜物によるものではありません。そのようなことはいとも容易く忘れてしまうものでございます。ですから貴方も望みの技を修得なされば、私への約束はお守りにならないのではと案じております」そこで司祭は、「如何なる高位に登るとも、貴方の申し付けられる事は必ずやって見せます」と誓約したのでございます。

このようなやりとりが食後から夕餉の仕度の始まる頃迄続きました。ともあれ両者の思わくが一致致しましたので、ドン・イリヤンは司祭に「魔術は隔離された所でしか御教示出来ません。そこで修得なさる迄ご逗留いただかねばならない所を今夜早速ご覧に入れましょう」と述べると、司祭の手を取り一つの室へ案内致しました。それから下婢を呼び、「申し付ける迄は料理に取り掛からなくともよいが、夕食には鵜を手当しておくように」と言い付けたのでございます。

こう言い終えらるとドン・イリヤンは司祭に声を掛けました。二人は見事に細工の施された石段迄来ますと、そのまま下降りて行ったのでございます。ところが余りにも下ったものから石からタホ川は二人の頭上を流れている様子でございました。石

段が尽きた所にはゆったりとした室と、見事な調度品でしつらえられた大広間とがありました。そこには沢山の書物が取り揃えられており、魔術の講義はこの大広間で行われることになっているのでございます。さて、兩人が座に着き取り掛かるべき書物をあれこれ選んでおりますと、そこへ二人の男が入って参り、司祭に伯父である大司教の書翰を差し出したのでございます。そこには、大司教の病が一刻の猶予もならず生前に会いたくば即刻戻られたし、と記されてありました。この知らせに、司祭は伯父の病への気掛かりと、緒に就いたばかりの学習を放棄せねばならぬことへの心残りのために苦惱致しましたが、学習を続ける決意を固めると、その旨を認めた返書を伯父である大司教に送ったのでございます。

それから三、四日経った頃、別の使いの者が司祭宛の書翰を携え徒歩でやって参りました。一通には大司教の訃報が記されてありました。他の一通には、後継者選びのために教団の全会員が参集しており、一同はその任に司祭を充てる意向にあるので急いで戻らなくともよい。教区外にありながら大司教に選出される方が貴方にとっては有利なだから、といった内容が記されてあったのでございます。

それからさらに一週間が過ぎた頃、立派な衣服に身を包んだ二人の使者が訪ねて参り、司祭の手に口付をすると、大司教に選出された旨を伝える書翰を手渡したのでございます。ドン・イリヤンはこの知らせを聞くと新大司教に、「私の邸にお出に

なりましたのに、このようなすばらしい知らせが貴方にもたらされました事を私は心から神に感謝申し上げます。神が貴方を大司教になされたのですから、空席となります司祭の座を私の息子にどうかお譲り下さい」と申し入れたのでございます。すると新大司教は「司祭の座は弟に譲りたいのでどうか承知してもらいたい。その代り御息子にはそれに見合う十分な償いをするつもりなので、サンティアゴ迄御息子同伴の上御同行をお願いしたい」と応えたのでございます。ドン・イリヤンは承諾する旨を伝えました。

一同はサンティアゴに向けて出立致しました。彼の地に着きますと、丁重な上にも大歓迎を受けたのでございます。さて、当地でしばらく滞在致しておりましたある日、教皇の使者が大司教宛の書翰を携えて参られたのでございます。一通には大司教がトロースの司教に任命された事が、他の一通には現在の位を継がせたい者に譲れる特典を授与する旨が記されてありました。ドン・イリヤンはこの知らせを聞き及ぶと、この前に交した約束の履行を強く迫り、息子に譲ってくれるよう口を極めて要求致しました。ところが大司教は「実父の弟である叔父に継がせたいので承知してほしい」と懇請したのでございます。大司教の要請は余りにも身勝手ではありましたが、ドン・イリヤンは次の機会には必ずこの償いを息子にしていたかくとで承諾したのでございます。新司教はドン・イリヤンの意向に添うべく努力することを約束すると、彼に息子共々トロース

迄の同行を願い出ました。

一行がトロースに着きますと、伯爵を初め当地の総ての貴族から大歓迎を受けたのでございます。当地での滞在が二年にも達しました時、教皇の使者が書翰を携えて到着致しました。書翰の一通には教皇が司教を枢機卿に任名された旨が記されており、もう一通にはトロースの司教職を継がせたい者に譲れる特典を授与する旨が記されてあったのでございます。早速ドン・イリヤンは司教の所へ行くと、「貴方は度たび約束を反古にして来られましたが、私の息子に司教職をお渡しになれない理由はもはやどこにもございません」と申したのでございます。すると新枢機卿は、「実母の兄で好々爺の伯父に司教職を継がせたいのでここは目をつぶってもらいたい。私は枢機卿に任名されたのでどうか教皇庁迄御息子共々随伴願いたい。彼の地では御息子に満足してもらえぬ機会も十分あるだろうから」と懇願致しました。ドン・イリヤンは不承不承ながらも新枢機卿の要望を受け容れますと、教皇庁迄同道したのでございます。

一行が教皇庁に到着致しますと、全枢機卿並びに教皇庁内の総ての聖職者から大歓迎を受けたのでございます。彼らはそこに長期間滞在しましたから、ドン・イリヤンは日々枢機卿に息子のために尽力を乞い続けました。ところがその都度枢機卿は言葉を濁すだけでした。

このような毎日を教皇庁で送ってありましたある日、教皇が

崩御なされたのでございます。すると、枢機卿が他の枢機卿全員の総意の基に教皇に推戴されましたので、ドン・イリヤンは直ちに教皇の所へ馳せ付けますと、『貴方には約束をお守りになれない理由は何ひとつとしてございません』と言上したのでございます。すると教皇は『御息にふさわしい官職を授けられる便宜の計れる余地はまだまだあるので、そのように責めないでもらいたい』と応えました。そこでドン・イリヤンは教皇がこれ迄に一度も約束を守らなかった事実を取り上げると強く不満の意を述べたのでございます。そして『これは貴方と初めて言葉を交した時から懸念していた事で、果して今最高位に登られたにも拘らず、約束を遵守されない貴方に私はもはや何も期待致しておりません』と迄申したのでございます。教皇はこの言葉に気分を害われ声を荒げて、『これ以上聞き分けのない事を申せば牢獄へ入れるぞ。お前が異端者の上に魔術師でもあり、トレードではその術でたつきを立てていたことは百も承知しておるのだから』と叱責されたのでございます。

教皇の報いが自分にとっては何害となっても一利にもならないことを悟ると、ドン・イリヤンは帰郷を決心致しました。ところが教皇は道中の糧食さえも彼に与えようとはしなかったのでございます。そこでドン・イリヤンは『私には食物が何ひとつとしてございませぬので、今夜料理するように申し付けておきました鵜を取り戻さねばなりません』と教皇に告げると、下婢を呼び、鵜を料理するように命じたのでございます。

ドン・イリヤンがこう言い終えると、教皇は自分がサンテイアールゴの司祭としてやって来た時の身形のままトレードにいるのに気付き、余りの恥かしさに口も利けなかったのでございます。ドン・イリヤンは司祭に『どうぞお引き取りになって下さい。貴方というお方をとくと拝見させていただきましたからには、鵜を御相伴いただくことはもったいのうございます』と申したのでございます。

ところでルカノール伯爵様、殿のご援助を仰いでおきながら、感謝もなさらないようなお方への処し方がお分りいただけましたからには、司祭がドン・イリヤンに行ったのと同じ仕打ちをお受けになられるために、そのお方を高位に登らせるべくご尽力なされたり、御身に危難をもたらすような事をこれ以上なされてはいけません。」

伯爵はこれを有意義な助言であると判断されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

人から受けた恩義に感謝しない者は、
位階を登るにつれ増々受けた恩義に報はない。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十二話 「狐と雄鶏に起った事について」

ルカノール伯爵は助言者パトローニオと、ある時このような話をしておられた。

「パトローニオ、お前も知っての通り、有難きことに予の所領は広大である。しかしながら一つにはまとまっておらぬことから、多くは守りが堅いと申せさ程でない領地や、予が本拠とする領地から懸け離れた領地もある。かかるが故に予が主君たる王や予に優る勢力を有す隣邦の諸侯達と戦を始めると、予の友であると自称する輩や顧問役を買って出る連中が何かと予の心を乱したり、『決して遠くに在る領地に居られてはだめで、必ず守りが最も堅固で、所領の要に当る領地に身を置かれよ』と助言したりする。そこで予は、忠義に厚くこのような事柄には精通しておるお前を頼み、この件に関して予が処すべき身の振方を助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「はなはだ重大な事柄に所見を申し上げますのは非常に難しいことでございます。と申しますのは、事の結果を定かに見極められる者は無く、従って自信を持って具申出来る者などはおられないからでございます。すなわち、期待しておりましたこととは正に裏腹の結果を見る事などは日常茶飯事でございますので、結果を凶と予測致しました事が実際にはそうとはならず、またこれとは逆の事態が生じたりするのでございます。ですから助言者が

誠実で善意の士であれば、いざ所見を述べねばならぬ時には呻吟するものでございます。結果が吉と出る助言を与えてこそ助言者は己の義務を全うしたことになり感謝されるのでございます。ところが結果が逆になりますと非難を浴びて天下に恥を曝すことになるからでございます。こういう訳でございますので、私も多分に疑わしくその上危険な要素を孕んでおりますこのお申し出には、助言致しかねますと申し開きが出来ますならば非常に有難いのでございます。しかし殿の御所望なればそれも叶いませぬので、これからお話し申し上げます狐と雄鶏に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのかとお訊ねになられた。「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「山中に住処を持つひとりの男がございました。男は様々な生物を飼っておりましたが、中でも鶏を多数飼育しておりました。ある時、一羽の雄鶏が住処から遠く離れた野原へのんびりと散歩に出かけました。すると狐が目敏く見つけ、捕えんものところりしので寄るといふ事態が持ち上がったのでございます。気配を察した雄鶏は仲間からやや離れている木に飛び上がりました。雄鶏に手の届かぬ所へままと逃げられた狐は悔しくてならず、捕える手だてをあれこれ思案すると、ゆっくりと木に近付きながら『降りて来て先程と同じように散歩しては』と、恐れるには及ばずと言った猫撫で声で話し掛けましたところ、そのような誘には雄鶏は何処吹く風でございました。狐は相手が如何なる甘

言にも乗じないのを悟りますと、『信用しないのなら今に後悔するぞ』と今度は脅しに掛かりました。しかし雄鶏は安全な所に身を置いておりますので、狐の脅しや甘言にはそ知らぬ顔でございました。

このような事では騙せないことに気付いた狐は、木をかじったり、尾を力一杯打ちつけたりし始めたのでございます。すると臆病者の雄鶏は訳も無くうろたえ始め、状況を適確に判断する冷静さを失い、身の安全をより計りたい一念から外の木へ飛び移ったのでございます。ところが仲間の居る方へは近寄れず、唯、別の木に移っただけのことでございます。狐は雄鶏がたわいも無い事で戦っているのを察知するや、この手を用いて手の届く所迄次第に追い詰めると、捕えて食べてしまったのでございます。

ところでルカノール伯爵様、殿は現に極めて危険なお立場におられますことから、有事への備を万全にしておかれねばなりません。決して水鳥の飛び立つ羽音に驚かれたり、威嚇や放言に故無く戦かれたり、さらには御身に重大な危険をもたらすような事を頼とされたりはなさらず、常に遠方に在る御領地の防備の強化にお努め下さい。そして、兵と糧食の備えに怠りなければ、たとえ本陣の防備が完璧ではなくとも攻撃されることとは無い、とお心得なさいませうことが肝要でございます。もし殿が訳も無く不安に急ぎ立てられて辺境の御領地を放棄なさいますと、次々に追い打ちを駆けられ、最後には全御領地が奪取

されることは必定でございます。すなわち殿を初め御家中の方々が恐怖心に駆られるや簡単に御領地を放棄なさることをお示しになれば、敵はますます総ての御領地を手中にせんものと奮い立つてあります。またそのような敵を御覧になるにつけ、殿や御家中の方々がさらに意気沮喪されますれば、最後には全御領地は敵の手中にという事態になるであります。しかしながら殿が最初の行動を貫徹なさいますれば安泰でございます。雄鶏も最初の木に留まっておれば無事でございます。総ての一国一城の主がこの話を耳にするならば、さぞ役立つことであろうと考えます。つまり、敵の攪乱戦術や、城壁破砕機⁽¹⁷⁾、攻城櫓⁽¹⁸⁾と言った様々な攻城機を用いての攻撃や、城内の者の心胆を脅かすためにのみ用いる他の諸道具を使つての攻撃に故無くうろたえる必要もなくなるからでございます。ところで、私が筋道の通つた事を申し上げておりますことをお理解^{わか}りいたゞきますために、平たく申し上げることに致します。つまり如何なる城塞も城壁を破壊されたり、梯子を用いられますと落城に到ると言うことでございます。しかし、城壁が高ければ梯子も及ばず、ましてや城壁を破壊するには大変な時間と労力が必要なのでございますから、落城する城塞^{とこと}の悉くは城壁に何らかの弱点が在る故にか、或は城内の者が訳も無く浮足立つからでございます。伯爵様、それ故に、殿と同じ御身分の方々は、或は殿よりも下の御身分の方々は、事をお始めなさいます前には事態をとくと見守られねばなりません。そしてどうあつ

でも避けられない、また避けるべきではない時には、断固たる決意で事に当られねばならないのでございます。そして一旦事を御敢行なされましたならば、何事にも毅然たる態度をお取りになることが肝要でございます。これは非常に大事なことでございませう。と申しますのは、危難に会う者の中でよく難を免れ得る者は、逃げ回る者よりも防御する者だからでございます。大柄なアラーノ犬に襲われました小犬ですら歯を刺き出して身構えれば、強敵をよく退け得るのでございます。ところが、如何に大型犬でありまして一度相手に後を見せれば、たちどころに攻められ殺されてしまうことを御承知おき下さい。」

伯爵はパトローニオの話にとても満足されたので、その通りに実行されたところ結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が非常に有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

何事にも訳無く恐れ戦くな、

男子たる者、己が身を立派に守れ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十三話 「鶉を捕えた男に起った事について」

て」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオと話をしておられたが、それは次のような事であった。

「パトローニオ、様々な身分の方が度々予の家臣や領地に損害を及ぼす行為を働き、予の立腹を招いておきながら、予と顔を会わすと、『相済まなくおもっている』とか、『あの際は万止むを得ぬ理由から必要に迫られてやってしまった』と弁明するのだ。そこでこのような事態が引き続いて生じた際、身の処し方を承知しておきたいのでこの件に関するお前の所見を述べてくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「具申せよと仰せの件でございますが、鶉を捕えた男に起きました事と非常に類似致しております。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ある男が鶉を捕えんものと網を仕掛けたのでございます。鶉が掛かりますとすぐさま駆け寄り、一羽ずつ取り出しては息の根を止めてしまったのでございます。ところが、その作業に追われておりました時、風が激しく男の目を吹き払いましたので涙がこぼれ落ちました。すると、まだ網の中にいた一羽の鶉が仲間にこのような

ことを言ったのでございます。

「おい、見るよ、あの男の容子を。俺達を殺しておきながら、ほら、胸が痛むのか泣いているぜ。」

すると近くにいた聡い鶉が、そのために網には掛からなかったのでございますが、それに応えてこのように言ったのでございます。

「おい、俺は御守護をいただいたので心から神に感謝しているところだ。殺そうとしたり危害を加えようとしているくせに、さも辛そうに見せる人間の手から俺や仲間をこれからもどうかお守り下さいとお願しているのだ。」

ルカノール伯爵様、殿の逆鱗に触れる行為を働いておきながら詭言を述べる人には常に御用心なさって下さい。しかしながら、あるお方がふとしたはずみから殿に不当な行為を働かれはされましたが、その被害が殿にとりまして取るに足らぬほどのものである上に、かつて殿はそのお方から御恩や御尽力をお受けになられたことがありで、それにそのお方の行為も不本意ながら万止むを得ぬ事情によるものでございますならば、看過なされますよう御忠告申し上げます。しかしながらそれは何時迄も殿の御面目を潰し、損害を及ぼす行為が行われないことが条件でございます。にも拘らず再び不当な行為を殿の身に及ぼされますならば、御領地と御面目をお守りいただくために断固たる態度をお取りいただかねばなりません。」

伯爵はパトロニーオの助言が非常に有意義であると判断され

たので、その通りに実行なされた。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談がとても有益であると考えたので本書に記すように命じた。そして次のような詩を作った。

悪事を働きながら後悔を装う者には、
心を許さず近寄るな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十四話 「聖ドミンゴが金貸のことで説教

した時に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵がパトロニーオと金銭のことで次のような話をされた。

「パトロニーオ、能う限り多量の金子を集めるようにと忠告してくれるお方がいる。何をさて措いても予にとっては大事なことであるとの由。そこでこの件に関するお前の所見を予は聴かせてもらいたいのだ。」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「殿のように御身分のある方々にとりましては様々な事で多額の金子が御入用でありますことは勿論、とりわけ、手もと不如意が元で有為な事を

お止めなさることの無きためにも、十二分の貯は必要ではございますが、さりとて御家臣の方々に給されます扶持の務や、御自身の御面目と御身分の保持をなさるに成されてまで、金の番人となって集められるべきものではないことをお心得おきいただきたくてでございます。さもなければ、ポローニャの金貨に起きました事が殿にも持ち上がるであらうから。」

伯爵はそれがどのような話であるのかとお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ポローニャに、手段を選ばず莫大な金子を掻き集めた金貨がございました。ところが明日をも知れぬ病に罹ったのでございます。その時ひとりの友人が彼の容態に気がきましたので、今ポローニャにお出になる聖ドミンゴに告解をするようにと勧めましたところ、金貨はその助言を聞き入れたのでございます。」

ところが、聖ドミンゴは金貨からの懇請をお聞き及びになられますと、これは死の病の床にある男がこれ迄の悪業の報から逃れようとする神意に背く行いである、とお悟りになられたのでございます。そこで代りにひとりの修道士を遣わされました。金貨の息子達は聖ドミンゴが招かれたことを知ると、聖者が父親に魂の救済のために全財産を喜捨させれば、自分達には一文の金も残らなくなるのを恐れ、気が気ではございませんでした。そこで修道士が参りますと、『只今父親は意識不明の状態にありますが口を利くことも叶いませぬ故、折を見ましてこちらからお迎えに上がります』と告げたのでございます。と

ところが間もなく父親は本当に口が利けなくなり息を引き取ったのでございます。こういう訳で、金貨は自らの魂の救済のために為さねばならぬ事を何ひとつとしてやれなかつたのでございます。

翌日、息子達が父親の亡骸を埋葬致します時、『死者に御祈禱をお願い致します』と聖ドミンゴに願い出ましたところ、聖者はその願いを聞き届けられたのでございます。ところが死者のことに触れになります時、福音書に述べる “Ubi est thesaurus tuus, ibi est cor tuum” という御文言を唱えられたのでございます。つまりこれは、汝の宝のある所に汝の心はある、⁽²⁰⁾ という意味でございます。それから参集者に向つて次のような事をお話しになられたのでございます。

「皆の衆、福音書の御文言が真であることをお目に掛けましょう。さあ、この者の心の臓をお調べなされ。さすれば亡骸の中にではなく、金子を納める櫃の中に在るのがお分りになりましょうぞ。」

そこで人々は亡骸を調べましたところそこには無く、聖ドミンゴの御言葉通り、櫃の中に在ったのでございます。その上中には蛆が充満し、鼻も挽げんばかりの凄じい腐臭がこもっております。

ルカノール伯爵様、申し上げましたように金子は無くしてはならぬ物ではございますが、次の二つの事をお心掛けなされて下さい。一つは、お集めになられます金子は合法的な手段による

物であること。二つは、御身にふさわしくない事、つまり、体面を省りみられず、務をもなおざりになされて迄金子を掻き集められたり、また、それ以外の事は何ひとつおやりにならぬほど御執心遊ばされぬ事でございます。合法的手段で多量の金子をお集めになれますならば、神の思恵と誉を手中に収められる事になりますよう。」

伯爵はパトローニオの助言にとても満足されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が非常に有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

真の宝を得よ、

やがて尽きる宝は避けよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十五話 「セビーリヤ包圍戦(21)の際、ドン・

ロレンソ・スアーレスに起った

事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオと次のような話をしておられた。

「パトローニオ、ある時、予はとても手強い王を敵に回すことになった。争いはすでに長期に及んでいたことからわれらはこころが矛を納める潮時と判断した。ところが和睦を結び、戦を止めたにも拘らず、今だわれらは互いに疑心を抱き続けておる。その上味方はもとより相手方の者迄が、王は戦を仕掛ける手掛を探し求めていると申すので、予はとても懸念しておる。そこで予はお前の叡智を頼み、この件に関して予の為すべきことを助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「これは様々な理由により助言することの極めて困難な事柄でございます。殿を戦に駆り立てんものとその機を窺っております連中にとりましては、そうすることなど造作も無いからでございます。と申しますのは、連中は殿のお役に立つことを願っております。のだと言わんばかりに「相手の動向に目を光らせ、防備を固めておかれるように」とか、「もしそうされないと御貴殿の身に及ぶ損害を想うにつけ心が痛む」などといろいろな事を常に殿のお耳に吹き込んで殿のお心を乱すであります。そのような疑心は暗鬼を生ぜしめ、殿は戦の火種となります有る事への備をなさらぬわけには参らず、連中はそれに異を唱えるはずはございません。つまり、御身を投げ出すようにと殿に申す輩は、殿のお生命を蔑ないがしろにしておるからでございますし、処々の城塞の修復や、防御に不可欠な兵や物資の補給を殿に進言しない輩は、御領地の存亡など意に懸けてはおらず、多数の友や家

臣を召し抱えられて彼らには十分礼を尽すようにと献言しない輩は、殿の御面目は元より御身の安泰など眼中にはないからでございます。殿がこのような事に心なされませぬ時は、大変な事態に御身を曝されることになりましょう。詰まる所、戦の緒となります隙をお与えになることだからでございます。しかしながら殿はこの件に関する私の所見を御所望でございますれば、ある立派な騎士に持ち上がりました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。

「天福を得られました高徳の王ドン・フェルナンドがセビリヤを包囲なされておられました時の話でございます。御家来衆の中に、名をドン・ロレンソ・スアーレス・ガリイナート、ドン・ガルシア・ペレス・デ・バルガス、それに、名を失念致しましたがもうひと方の、合わせて三名の当代切つての武勇に秀でた騎士がございました。ある時この三名の騎士は、何れが自分達の中で最も武勇に秀でた者であるかについて議論し合つたのでございます。ところが論議は一向にまとまらず、結局、武器に身を固めてセビリヤの城門迄馬を駆り、長槍をその大門に突き当ることになったのでございます。」

翌朝武器に身を固めた三名はセビリヤ城市へと赴きました。稜堡や望楼におりましたモーロ兵達は、わずか三騎だけで

やって参ります敵を見ると使者と判断致し迎撃に打って出なかつたものですから、三名の騎士はやすやすと濠に架かる跳橋を渡り、物見櫓の下を過ぎて城門に達すると、その大門に長槍を幾度も突き立てたのでございます。首尾よく果すと三名は手綱を返し帰陣の途についたのでございました。

モーロ兵達は彼らが何も告げぬことに気付き、愚弄されたことを悟ると、追撃に出るべく急いで開門致しましたが、その時はすでに、三名の騎士は遙か彼方へと遠ざかっておりました。

しかしながら騎馬の兵千五百、徒歩の兵二万を越すモーロの軍勢が追撃を掛けましたから、背後に敵の大軍が迫り来るのを察知致しました三名の騎士は、再び手綱を返して待ち構えたのでございます。敵の軍勢が指呼の間迄に押し寄せました時、私が名を失念致しました騎士が突撃を掛けたのでございます。ところが、ドン・ロレンソ・スアーレスとドン・ガルシア・ペレスの両名は身じろぎもせず平然と身構えたままでございました。しかしいよいよ敵が目前に迫りました時、ドン・ガルシア・ペレス・デ・バルガスが突進致しました。それでもなおドン・ロレンソ・スアーレスは泰然自若たる態度を持したまま、モーロの騎馬兵の鋒先がまさに身を貫かんとする寸前迄微動たりともしなかつたのでございます。しかし、ひと度敵中に攻め入るや、その闘い振は獅子奮迅の活躍でございました。

本陣を守るキリスト教徒軍は、三名の騎士がモーロの軍勢に攻囲されているのを目にするや救援に馳せ付けました。三名の

騎士は今や危機に瀕し、万身創痍の有様ではございましたが、神の御慈悲により、落命に至るほどの深手を負ってはおりなかつたのでございます。兩軍の戦闘は拡大し、増々苛烈になりましたので、終に国王ドン・フェルナンドが御出馬遊ばされることになったのでございます。かくしてキリスト教徒軍はその日見事に勝利を博したのでございます。王は御帰陣なさいますと三名の騎士を取り抑えるよう御命じになられ、さらに「予の命も無くに味方を戦闘に引き入れた事。及び三名が生命を粗末に扱った事は狂気の沙汰の何物でもなく、死に価する行為である」と宣告されたのでございます。しかし重臣達が王に御慈悲を願い出られましたところ、王は温藉の情をお示しになられたのでございます。

さて、王はこの度の戦闘が三名の武勇の競い合いから生じたものであることをお聞き及びになりますと、御重臣方をお集めになられ、「三名の中から最も武勇に秀でた騎士を判定せよ」とお命じになられたのでございます。一同は会すると激論を闘わせました。最初に突撃を掛けた騎士を推す者、ドン・ガルシニアの肩を持つ者、ドン・ロレンソを推挙する者、意見は三つに分れてしまいました。各々の騎士を推す重臣達はもっともな理由を述べ立てました。実際、三名の行為は賞讃に価する見上げたものであったからでございます。しかしながら激論も末には次のような結論に至ったのでございます。三名を攻囲したモローの軍勢が彼らの活躍で敗北するほどの数であったならば、

最初に突撃を掛けた者が最高の勇者である。何故ならば彼は事の結末を見通した上でそれを行ったからである。しかしながら敵の数が三名では到底打ち破れぬほどの数であったならば、最初に突撃した騎士の行為は敵を撃破するためではなく、戰場から逃げ出すという不面目を避けるためであり、内心の不安や恐怖に耐えかねてのことである。二番目の騎士はこれよりもまだ沈着であったから、最初の騎士よりも勇者であると言えるが、恐怖心を克己し敵の鋒先が身に及ぶ寸前迄泰然自若に身構えていたドン・ロレンソ・スアーレスこそ、最も豪胆で勇氣ある騎士であると判定されたのでございます。このように、殿も泰然自若たる態度で御身を持されますならば、大きな禍を招かれることもございませぬ。常に冷静沈着たる態度をお心掛け下さいますようご忠告申し上げます。さすれば、予期せぬ禍が御身に降りかかることもございませぬ。どうか攻撃を仕掛けられます迄は、手をお出しなさいませぬように。必ずや殿のご懸念の元は根も葉もない噂であり、魚夫の利を目論み火事場泥棒を決め込む輩が立てた流言蜚語であることがお分りになるであります。敵或は味方を問わず、このような輩は戦か和平かのどちらかを是非とも希求致しておるのではございませぬ。彼らの願は混乱状態を引き起す事にあり、さすればその機に乗じて御領地を攻略することや、殿を初め御家来衆を抑えつけることも出来すし、そうなりますと、有形無形の利益を殿から引き出せます上に、自分達の卑劣な行為を咎められる恐れもないか

らでございます。故に相手方の挑発をお受けになられましても、実際に攻撃を仕掛けて来る迄は御堅忍の上に自重なさいますれば、相手は手出しすることが叶わず、返って殿には殊の外有利となりましょう。それは、先ず第一にこのような場合の又と無い心強い加勢であります神をお味方になされるからでございます。第二は殿の御行為は正当なものであると世間は考えるであります。ましてや殿が理不尽な行動をお取りになられねば相手方もおそらく攻めては来られませんまい。そうなりますと、殿は御安泰となり、また神の意に添われることにもなりません。さすれば行い正しい人々をお味方になされるばかりか、禍を引き起しておきながら何ら悔いることもなく、責を負わずに魚夫の利を目論む輩を喜ばせるために御身を損われることもございませぬ。」

伯爵はパトロニーオから受けられた助言にとても満足されたのでその通りに実行されたところ、結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので本書に記すように命じた。そして次のような詩を作った。

不安に駆られて敵に隙を与えるな、
耐え得る者が常に勝利するのであるから。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十六話 「フェルナン・ゴンサーレス伯爵

が縁者のヌーニョ・ライーネス
に与えた返答について」

ルカノール伯爵は、ある時パトロニーオとこのように話をしておられた。

「パトロニーオ、お前も知っての通り予はもはや若くはない。その上予のこれ迄は苦勞の連続であった。今、予はお前にはつきりと申すが、この苦勞から解き放たれてこれからはのんびりと狩などに打ち興じて余生を送りたいのだ。そこで、お前が常に適切な助言を与えてくれることは百も承知なればこそ、予はお前が考える最もふさわしい身の振方を助言してくれるように頼む。」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「殿の御心境はごもつともなことで存知ます。しかしある時フェルナン・ゴンサーレス伯が縁者のヌーニョ・ライーネスにお述べになられましたことをお聴きいただきますれば幸いです。」

ルカノール伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。

「ブルゴスにお出になりましたフェルナン・ゴンサーレス伯は、御領地の御防禦にとても御苦勞をなされておられました。し

かし戦さも収まり泰平になりましたので、ヌーニョ・ライーネスが「今後は戦のことなどお忘れになられて心身をお勞りにされるのがよろしいであります。それに兵にも休養を取らせなされませ」と進言したのでございます。

ところが伯は、「よしんばそのようなことが出来たとしても、予以外の誰ひとりとして喜ぶ者はあるまい。よいか、われらはこれ迄モーロ勢やレオン勢、それにナバーラ勢と戦をして参ったのだ。ここでわれらが気を緩めようものなら、敵は間髪を容れずに攻め寄せて参るのは必定だ。領地の防御を怠り、鈍重なロバの背に揺られながら、アルランソン河畔で鷹狩を楽しまたいのであれば、そのようなことは造作無いことだ。しかしながらそれは古い諺の言う、人は死して名を埋む、ということになるであろう。ところが、心を引き締め、防御に励み、名目を施すならば、死後には、人は死して名を留む」と称されるであろう」とお応えになられたのでございます。さて、享樂或は刻苦勉勵、何れの人生を送るとも人は皆死なねばならぬのでございませぬから、私には死後に名を留めるような行跡を残すことも無く、安閑として人生を送るのは良いとは思われませぬ。

伯爵様、殿は不死の人ではございませぬ。故に死後にも御名をお留めなさいますような行跡をお残しになることもなく、ただ安閑として余生をお過しなさるべきではないことをご忠告申し上げます。」

伯爵はパトロニーオから受けられた助言にとても満足された

のでその通りに実行されたところ、結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記すように命じた。そして次のような詩を作った。

人の代は短かく、享樂して過ぎば、
名を腐し、名を汚すのみ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十七話 「義理で食事に招かれた空腹を抱

える男に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとの話の中で、次のようなことを語られた。

「パトロニーオ、あるお方が参られて、予の為にすこぶる都合な企を行うつもりであると告げられた。ところがその口調には、言葉通りにその申し出を甘受してもらいたくないとおもいが込められているのが分った。いかにその申し出が予にとって喉から手が出るほどのものであるとは申せ、義理で申しおることが分っておりながら甘受するのは気が進まぬ。そこでお前のすばらしい叡智を頼み、この件に関して予の取るべき態度を助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「殿を利用するかのお申し出に對処なされますには、朋輩を食事に招待致しました男に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「かつては長者でありました者が極貧に陥ったのでございます。しかしながら恥を捨てて迄施を乞うことは出来なかつたものですから、日夜辛い飢の苦しみにもじっと耐えておりました。ところがある時、いよいよ食物何ひとつとして手にすることが叶わなくなり、悲嘆にくれてさまよっておりましたところ、偶然にも食事中の知人の家の前を通りかかったのでございます。すると屋内から彼の姿を見掛けました知人が、「食事はどうかね」とお義理で彼に声を掛けたのでございます。切羽詰った状態にありました彼は、早速手を洒ぎながら次のように返辞致したのでございます。」

「これはこれは何某殿、貴方のご熱心な食事のお誘いをお拒りして迄、折角のご好意をなおざりにすることほど失礼なことでございますまい。」

こう言い終えるや食卓に向うと、あの惨めで辛い空腹をすっかり充たしたのでございます。以後、神は救いの手を差し伸べられ、この極貧状態から抜け出す手だてもお授けになられたの

でございます。

ところでルカノール伯爵様、そのお方のお申し出は殿にとりまして極めて好都合な事なのでございますから、相手のお方には「折角のご好意なのでお受け致します」との意向をお示しになられまして、御友人の思惑などは意に介されないことでございます。先方は二度とお声を掛けられないであらうから、すぐさまお受けになられることでございます。もし殿の方から願ひ出られますならば、殿にとりましてこれ以上の不面目はございませんので。」

伯爵はこれをとても有意義な助言であると判断されたのでその通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記すように命じた。そして次のような詩を作った。

利が見込まれることに、
自ら進んで願ひ出るな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十八話 「片足を骨折した時、ドン・ペド

ロ・メレンデス・デ・バルデー
スに起った事について」

ルカノール伯爵は助言者パトロニーオと、ある時次のような話をされた。

「パトロニーオ、知つての通り、予は今強大な勢力を有す隣邦の諸侯との戦の最中にある。われらは互いにある邑へ進軍せんと策戦を立てた。先陣争いに勝つた方が邑を占有するのは当然至極だ。知つての通り予の軍勢は今集結しておるので武運を得て一気に進軍すれば、嚇々たる名譽と邑を手にする事は間違いない。ところが予の健康が勝れぬことから、この好機に乗ずることの出来ぬのが齒痒くてならぬのだ。邑の占有が叶わぬことはこの上もなく無念ではあるが、それにもまして、敵が面目を施し、予が不面目を被るのが何とも口惜しくてならぬのだ。そこで、予が寄せる信頼に応えて、お前はこの件に関して予の取るべき態度を助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「殿のご無念ごもっともなことです。ございますが、今後、このような事態が生じた際、殿の身の処し方の手本となりますドン・ペドロ・メレンデス・デ・バルデースに起きました事をお聴きいただけますれば幸いです。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ドン・ペドロ・メレンデス・デ・バルデースはレオン王国の非常に御身分の高い騎士でございました。困難が持ち上がりますとその都度口癖の、神よ祝福されてあれ、神の爲し給うことは最善なり」と申しておられたのでございます。

ところで、このドン・ペドロ・メレンデス・デ・バルデースはレオン王の御相談役を務めておりました。その上に王の覚めめでたいことから、朋輩達は激しく彼を嫉んでおったのでございます。それ故、連中は何かと嘘偽の噂を流しては、悪辣な誹謗中傷を王の耳に入れておりましたから、王は彼の殺害をご決意なされたほどでございました。

さて、ドン・ペドロ・メレンデス・デ・バルデースが館にお出になりますと、参内せよとの勅命が下りました。ところが館から半哩ほど離れた所では暗殺者達が波を待ち伏せておったのでございます。一方、ドン・ペドロ・メレンデースは王に拝謁すべく馬に乗ろうと段を下りられる途中、足を踏み外されて転げ落ち片足を骨折されたのでございます。この不慮の出来事を眼の当りに致しました供の者達は、お気の毒だとは思いつつも御主人をこのように擲擄し始めたのでございます。

「しっかりなされませ、ドン・ペドロ・メレンデス様。神の爲し給うことは最善なり」がお口癖なれば、さあ、只今神が

為し給われた思召を甘受なされませ。」

そこで彼は供の者達に、「お前達はこの不慮の出来事をとても残念がつておるが、神の為し給う事は最善であることが今に必ず分ろうというものだ」とお慰えになられました。しかしながらいくら説き聞かされましても、供の者達の考えを変えることは出来なかつたのでございます。

一方、王の密命を受け、手ぐすねひいて待ち構えておりました暗殺者達は、彼の来れない理由を察知致しますとすぐさま立ち戻り、御命令を全うし得なかつた事の次第を王に申し上げたのでございます。

足の骨折のためにドン・ペドロ・メレンデスが長らく乗馬に親しめなかつた間に、王は彼に対する連中の非難が真赤な偽であることをお知りになられ、彼らを取り抑えるようにお命じになられたのでございます。そして、王御自らドン・ペドロ・メレンデスの館へお出向きになられますと、彼のことで連中からお聴き及びになられた誹謗中傷と、それを鵜呑にして彼の暗殺をお命じになられた経緯とお話しになられました。そして、危うく犯すところであつた過に対して許を求められると、償いとして褒賞と叙位を授与されたのでございます。その上で、卑劣な偽言を申した連中の処刑を彼の面前で執行するようにお命じになられました。

神がこのようにしてドン・ペドロ・メレンデスをお救いになられましたのも、彼が無実であり、彼の口癖となつておりまし

た言葉、神が為し給う事は総て最善なり、が真実であつたからでございます。

ルカノール伯爵様、今直面なさつておられます困難をお嘆きになられてはいけません。それよりも、神の為し給う事は総て最善なり、を肝に銘じられることでございます。常にそれをお心掛けなさいますならば、神は殿のために総てをよろしく思召されるであります。しかしながら御心置きただかねばなりません。一つは、防ぐことが可能なもの。二つは、それが不可能なものでございます。でございますから、一の場合には全力を尽して策を講じられねばなりません。唯、運を天に任せ、無為に過されてはいけません。それは神を試す行為となるからでございます。人は思慮分別を持ち合わせておるのでございすから、降りかかる禍から身を守るためには全力を尽さねばならないのでございます。しかしながら防ぐことの能はざる禍には、神意により為し給われる事は最善なり、と信ずる外はございません。こういう訳でございますので殿の身に生じました事は神意の為せる業でございますから、防ぐことは叶わず、神の為し給う事は最善なり、をしかと御心にお留めいただかねばなりません。さすれば神は殿の御心通りに事を運ばれるでありますやう。」

伯爵はパトローニオが真理を述べ、かつ有意義な助言を与えてくれたと判断されたのでその通りに実行された。すると結果

は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

神の為し給う事に不平を漏らすな、
やがて福と為されるであろうから。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第十九話 「鴉と梟に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニオと次のような話をされた。

「パトロニオ、予は目下ある強敵と争っておる。敵の城中には彼が何くれとなく面倒を見、手塩に掛けて養育して来た縁者がある。近頃両者の間に諍が生じ、敵が縁者を手酷い目に会わせた上に辱かしたことから、縁者は、余りの仕打に報復せんものと恩義に背いて予の懐にとび込んで参った。予にとってこれほど願っても無いことはない。相手は敵の身内の者故、最も手の掛からぬ攻め手を教えてくれようというものだ。そこでお前とお前の叡智を頼み、この件に関して予が処すべき身の振

方を助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトロニオは返答した。「先ず初めに申し上げておきますことは、そのお方が殿の所へ参られましたのは唯殿を欺かんがためにでございます。そこで、それが策略であることをお分りいただけますよう、梟と鴉に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニオは語り出した。「鴉と梟は熾烈な闘を繰り広げておったのでございます。ところが鴉の方が窮地に追い込まれました。と申しますのは、梟の習性は夜間に行動することです。彼らは昼間は発見され難い洞穴に身を潜めており、夜になりますと鴉がねぐらにしております樹木を襲っては、かなりの数に上る敵を殺傷していたからでございます。宿敵の梟から仲間達が夜毎襲撃されては甚大な被害を受けておることに心を痛める聡い一羽の鴉がございました。これが仲間と相談を持ち掛け、次のような報復手段を編み出したのでございます。

それはこのようでございます。仲間から羽をむしり取らせたのでございます。しかしながら辛じて飛べるだけの羽は残させました。無惨な姿で梟の所へ駆け込みますと、仲間から酷い目に会ったことを、それも、皆さん方と争ってはいけなと言ったがためにこのような目に会わされたのだと打ち明けま

した。そして、『この怨は是非とも晴らしたく、もし皆さん方がお望みとあらば、奴らに意趣を晴らし、完膚なき迄に叩き潰すことの出来る手だてを何なりとお教え致します』と告げたのでございます。

梟達はこれを聴いて歓喜致しました。この鴉のお蔭でもはや勝利はわが方にありと確信したからでございます。早速鴉を丁車にもてなし、その上すっかり信用すると、あろうことか自分達の機密や計画を洗いざらい喋ったのでございます。

ところが、経験豊かな一羽の老梟が鴉の言動は偽であることを見抜き一族の長の所へ行くと、『あの鴉が我々の所へやって参ったのは仲間の仕打の所為ではなく、我々の機密を探るためであることは目に見えておりますので、さっさと追い出すべきでございます』と進言致しました。しかし、仲間達が自分の忠告を真に受けず、信じようとしないので、仲間達に見切をつけ、鴉の目には届かない場所を求めて飛び去ったのでございます。

それでもなお、他の梟達は鴉を信頼し切っておったのでございます。ところが、そうこうする内に鴉の羽が元のように生え揃いましたから、『飛べるようになったので敵の居所を探りに行くつもりだ。分り次第知らせに戻らるから、敵をせん滅出来るよう集合しておくように』と広言致しましたので、梟達はこの言葉に欣喜雀躍したのでございます。

さて、鴉が元の仲間の所へ戻りますと全員が集合致しまし

た。一同は梟の習性を一部始終承知すると、のんびりと安心し切っている昼間の時を狙って襲いかかりましたから、瞬く間に敵をせん滅するとの戦の勝者となったのでございます。

梟にもたらされましたこの惨劇は、彼らが宿敵である鴉に信頼を寄せた結果によるものでございます。

ルカノール伯爵様、殿の懐に身を寄せられましたお方は敵方のお身内の方でございますれば、当然殿の敵であることを御承知おき下さい。決して御陣営の一員に加えられてはいけません。殿の目を欺き危害をもたらさんのために参られたことは間違いございません。しかしながら、もしそのお方が殿の寝首を窺ったり、動向を探ったりすることが出来ぬよう遠くから殿のために尽すことを願われ、さらに、そのお方にとって大恩ある殿の御宿敵に復縁が叶わぬほどの致命的な損害を与えられるのであれば、その時初めて殿はそのお方をご信頼なさればよろしいのでございます。しかし、それも飼犬に手を噛まれることのない程度でよろしいのでございます。」

伯爵はこれを非常に有意義な助言であると判断されたのでその通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談がとても有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

宿敵たる者に、

決して信頼を寄せてはならぬ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第二十話 「ある王と黄金を作り出せると言

った男に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオとこのように話をされた。

「パトロニーオ、あるお方が参られて予にこのような申し出をされた。『富と名声を得させてやりたいが、そのためには元手が必要なので、事を始めるに当って何がしかの金子を出資してもらいたい。成就の暁には元手の金子は十倍となって戻るだろうから』と。そこで、神から授けられたお前の素晴らしい叡智を頼み、この件に関して最もふさわしい予の身の振方を助言してくれるように頼む。』

「伯爵様、この件に關しまして殿が最もふさわしい御身の処し方をなされますには、ある王と黄金を作り出せると言った男に起きました事をお聴きいただきますれば幸いです。』

伯爵はそれがどのような話であるのかとお訊ねになられた。「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「大金を手に入れ、惨な生活から抜け出したいと切望する稀代の詐欺師がございました。折しもこの男は、ある暗愚なる王が鍊金術

に殊の外で執心である、という噂を耳に致しました。

そこで百ドラの金貨を手に入れますと、それを細かく碎き、そこへ様々な物を混ぜ合せて一ドラ金貨と同じ重さの小さな球を百個作りました。そして各々の球には一ドラ金貨に相当する金が含有するように仕上げたのでございます。

それから、いかにも身分不相応な実に立派な衣服に身を包むと、例の百個の球を携えて王がお出になる御城下へと赴きました。そして百個の球を雑貨屋に売り払ったのでございます。その時雑貨屋はこれらの球の使い道を訊ねましたから、詐欺師はいろいろな事に、とりわけ鍊金術を行う際には不可欠な品物であると応えました。そのような品をわずかに二、三ドラの金貨で売り渡したのでございます。再び雑貨屋が球の名を尋ねましたので、詐欺師は『タバルディーエ』と告げたのでございます。

さて、御城下での詐欺師は隠遁者のように振舞っておりましたが、密かに鍊金術が行えることを触れ回っていたのでございます。

そうこうする内にこのような噂が王の耳にも届きましたので、早速使いの者を送られて彼を召し出されますと、『鍊金術が行えるのか』とお訊ねになられたのでございます。ところが詐欺師はとんでもないとばかりに、『そのようなことは存知ませぬ』と返答致しました。ところが最後には言を翻したのでございます。しかしながら彼は、『このような事でむやみに人を

御信頼なされたり、多額の金子をお賭けなされませぬようご忠告申し上げます。それでもなお王が御所望なされますならば、御前で試して御覧に入れました上で、やり方を御教示申し上げますことに致します」と奏上致したのでございます。この言葉に王は痛く御感激になられ、彼が詐欺師であるとは露程にも疑われなかったのでございます。早速詐欺師は総ての必要な品を取り揃えさせました。それらはごくありふれた容易く手に入る物ばかりでしたが、勿論タバルディーエという球を求めさせたことは言う迄もございません。費用もわずか二、三枚の銅貨を要しただけでございました。さて、総ての材料が取り揃えられましたので、早速王の御前でそれらを溶解致しますと、一ドブラ金貨に相当する黄金が現われました。わずか銅貨二、三枚の値打しかない材料から、一ドブラ金貨に値する黄金が生じた事を眼の当りになされた王は殊の外御満悦で、御自身を世界一の果報者であると思召されましたので、「そちはなかなか大した奴だ、もっと黄金を作り出せ」と詐欺師にお命じになられたのでございます。

すると詐欺師は、これ以上は何も承知しておらないかのよう
に申したのでございます。

「王様、私が修得致しました術は総て御覧いただきました。これからは御自身でも私の様に容易くお作りになれます。しかしながら、この材料だけはお忘れになりませぬように。これ無くしては黄金を作り出すことは不可能でございますから。」

こう言い終えるや詐欺師は王の下をさっさと辞して帰宅したのでございます。

王は御自分で黄金を作り出そうと材料を二倍にしてお試しになられましたところ、ドブラ金貨二枚の重さに等しい黄金が現われました。そこでさらに材料を倍に増されすと、ドブラ金貨四枚と同じ重さの黄金を手になされたのでございます。このように材料を増されすと、それにつれて黄金も倍になって現われましたから、王は望むがままに黄金が作り出せるものだとお考えになられ、ドブラ金貨千枚分に相当する材料の手当をお命じになられたのでございます。ところがタバルディーエだけがどうしても手に入らず、これが無ければ黄金の作り出せぬことは御承知でございましたから、錬金術を教示してくれた詐欺師を召し出されすと、「これ迄のように黄金が作り出せぬのだ」と仰せになられたのでございます。すると詐欺師は、「書き留めておきました材料は総て揃っておりますでしょうか」と王に尋ねましたところ、「タバルディーエ以外は総て揃っております」とお応えになられたのでございます。

そこで詐欺師は「初めに申し上げましたように、一つでも材料が揃いませぬと黄金は作り出せないでございます」と申したのでございます。

すると王は「タバルディーエの在る所を知っておるのか」とお訊ねになられたので、詐欺師が「はい」と返辞致しますと、王は「その所在を知っておるのなら、行って、予が望む

だけの黄金が作り出せる多量のタバルディーエを持って参れ』と、詐欺師に申し付けられたのでございます。

すると、『どなたにでも私同様或はもっと容易く手に入れられる物ではございますが、私にそれをやれとの御所望でございますれば、参る所存にございます。私の生国にはふんだんにございますから』と詐欺師は応えました。そこで王はそれを求める費用を一切合財御勘定なさいましたところ、莫大な額になったのでございます。

詐欺師はその多額の金子を懐に入れるとすぐさま出立致しました。勿論二度と王の下へは戻って来なかったのでございませぬ。このように、王は自らの暗愚が原因で見事に欺かれたのでございます。王の方は詐欺師の帰還が余りにも遅いことから、その理由を知ろうと彼の棲家へ使者を遣わされましたところ、そこで使者が目にした物は鍵の掛った櫃だけでございました。蓋を開けますと、中にはこのように記された紙片が一枚入っております。この世にタバルディーエなる物は存在しないことを御銘記なさることでございます。私は王様を欺きました。私が「富裕にして差し上げます」と申し上げました時、王様は「先にお前がなってくれるのなら信じてよい」と仰せになるべきでございました。

この一件から数日が経ちました頃、二、三人の男達が冗談を言つては笑いこぼしておりました。それというのも、彼らは知っている限りの人の名や特徴を、勇しいのは何のなにがし、

金の有るのは誰それ、思慮のあるのは誰某、という風に、善悪構わず全ゆる事を書き記していたからでございます。

さて、愚者の名を書く段になりますと真先に王を槍玉に揚げたのでございます。これが王の耳にも届きましたので、使いの者に彼らを召し出させられますと、科めるつもりも毛頭ないことを確約なされた上で、彼らが自分を愚か者の中へ加えた理由を訊ねられました。すると彼らは「王様が何処の馬の骨とも分らぬ者に多額の金子をお渡しになられたからでございます」と返答したのでございます。そこで王は「お前達は間違つておる。もし金子を持ち去ったあ奴が戻つて参つたならば、予は愚か者の中に入らぬことになるのだぞ」と申されますと、彼らは「そうなりましても数には変わりございません。もしその男が戻つて参りましたならば、王様に代つてそ奴の名を書き留めますので」と応えたのでございます。

ルカノール伯爵様、殿は愚か者と見做されるのがお嫌でございますならば、不確かな事に身代をお賭けになられてはいけません。そのような事に大儲を御期待なさいますと、無一文となられ後悔のみが残るだけでございます。」

伯爵はこの助言に満足されたのでその通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

失う物が何ひとつ無き者の言葉に、
身代を賭してはならぬ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第二十一話 「ある若き王と王の尊父から依

頼を受けた偉大な賢者に起った
事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオとこのように話をしておられた。

「パトローニオ、予には殊の外敬愛してやまぬ縁者がある。ところがまだ独り立ちならぬ子息を残して他界した。そこで予はその忘れ形身を養育することに決めたのだ。その子の父親には一方ならぬ恩義を受けて参ったし、敬慕してやまぬお方であったからだ。それにこの忘れ形身が成人の暁には、何かにつけて彼の助勢を望めようというものだ。その上何よりも、予がわが子のように可愛がっておくことは神も御承知である。大そう利発な若者なので、きつとひとかどの人物になるものと信じておる。しかし、若さというものは常に若者を惑わせ、不為とな

ることばかりをさせるので、予は彼も同じ轍を踏まぬかと懸念しておる。そこでお前の叡智を頼み、この若者が心身は元より身代のためにも最も有為な行いをするには、予が如何なる方法で彼を訓導すべきかをお前に助言してもらいたい。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「考えまするに、その若君のために殿がよろしく御指導なされますには、ある偉大な賢者と彼が訓導致しました若き王に生じました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵は、それがどのような話であるのか聴かせてくれるように頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ある王にはひとりの王子がございました。王は心から御信頼なさっておられます賢者に、吾子の教育を託されたのでございます。ところが王が崩御なされましたことから、いまだ独り立ちならぬ王子が王位に着かれることになりました。若君は御年十五才に成られる迄は賢者の指導の下で成長されたのでございますが、成人なされてからは賢者の言葉を蔑ないがしろにされるようになり、御身の為にはならぬ無頼の仲間の言葉に雷同されたのでございます。それからと言うものは、王子の生活は乱れる一方でございます。それから、瞬く間に身代は瘦せ細り、王子は身も心もすっかり荒むほどの変りようでございます。こういう訳で、若き国王が身を持ち崩し身代を浪費していることは民の非難の的でございます。御乱行は増ます酷くなりましたので、御養

育掛の賢者の心痛は一方ならぬものがございました。威したり賺したり、若君を立ち直らせるべく万策を尽して懸命に努めましたが見目は全く見あたらず、若氣の過にある若君には手の施しようが無かったのでございます。賢者は尋常なやり方では戒められないことを痛感致しましたので、これからお聴きいただきますような手だてを考えついたのでございます。

賢者はおもむろに「自分は鳥の言葉が理解わかるこの世で一番の占おい師である」と宮中で吹聴し始めました。若き王の耳にも届けとばかりに誰彼と無く言い触らしたものですから王もお聴き及びになられ、「お前は占おい師だ、と皆が申しておるのは真か」とお訊ねになられたのでございます。すると賢者は「滅相もない」と初めは首を左右に致しましたが結局は肯ずると、「世間に広まるのは好ましくございません」と申し開きをしたのでございます。ところで、若者は性急に一度で総てを知ろうとしたり行ろうと致しますように、若き王も賢者の占おい振が早く御覧になりたくてしきりに急き立てられたのでございます。しかし賢者は曖昧な返辞を繰り返すだけでございますから、若き王の忍耐も今やこれ迄といった状態にありました。頃はよしとばかりに賢者は、「何人にも鳥の声で占おっている様子を見られたくはございませんので、翌日の早朝出かけることに致しましょう」と若君に約束致しました。

二人はまだ明けやらぬ内に床を離れますと、賢者は若き王を住人に見捨てられた村々が散在する谷間へ案内致しました。い

くつもの廃村を通り過ぎた後、やっと二人は木に止って鳴いている一羽の小鴉を見つけたのでございます。王が小鴉を指し示されますと、賢者はその鳴声の意味が理解わかるかのように領きしました。

すると、近くの木へ飛来したもう一羽の小鴉も鳴き出し、たちまち二羽の小鴉は互いに鳴き交し始めたのでございます。ところがその鳴き声をしばらく聴いておりました賢者は、さめざめと涙を流し始めたかと思うと、やがて衣服を引きちぎっては身も世もあられぬほどの激しさで悲嘆にくれ始めたのでございます。

若き王はこの容子を御覧になると非常に驚かれ、直ちにその理由をお訊ねになられました。ところが賢者はご心配はご無用でございますとばかりの素振を致しましたので、執拗にお訊ねになられましたところ、「私は死にとつてございます。人間はおるか鳥までもが、王の御乱行の酷さの余りに王国全体が荒み、御身代が傾いておりますことや、王が民の非難の的であることなどを先刻承知致しておるからでございます」と告げたのでございます。すると王は「それはどういふことだ」とお訊ねになられました。

そこで賢者はその訳を語り出しました。「あの二羽の小鴉は以前から各々の息子と娘を一緒にさせようと取り決めておりましたので、先に鳴き始めた小鴉が——婚約させてから随分経つのでここで一緒にさせるのがよろしいのでは——と相手に持

ち掛けました。すると——あの頃なら確かに一緒にさせてやるべきでした……ところが、今じゃ私は貴方よりも裕福になりましたし……有難いことに、今の王様が統められてからというもの、この谷間の村という村から人影は絶え果て、廃屋となった家々には無数の蛇や蜥蜴や蛙、それにこのような所には好んで棲息するいろいろな蛆虫が見つつけられるのですからね。とにかく今では美味な喰物には事欠かぬほどありつける訳でして、この縁組は今じゃ不釣合ですよ——と答えたのです。先の小鴉はこれを聴くと大笑いしながら——そのような理由で縁組の日取を延期されたいとは馬鹿げたことを言われるものだ。神がこの王様に生命を与え続けられるならば、私はやがて貴方よりも裕福になりますよ。私の棲んでおります谷間にはここより十倍も多い村がありますね、間も無くそれらも無人の住処となるでしょう。ですから縁組の日取を延ばす理由など何ひとつ無いのですよ——と応えました。こういう訳で二羽の小鴉は直ちに縁組の日取を定めたのでございます。」

若き王はこの話をお聴きになってとても苦悩なさいました。王国をみだりに荒廃させることが如何に不面目であるかに思いを及ぼされ始めたのでございます。賢者は若君のお嘆きや御懸念の容子、それに若君の立ち直りたいとの有様を見てとるといふ適切な助言を与えましたので、若き王の素行は元より王国を初め何も彼もが瞬く間に正常になったのでございます。

伯爵様、殿はこれ迄御養育なさって来られましたお身内の方

の忘れ形見を、これからも正しくお導きになられたのでございますれば、楽しくて為になる話や教訓談などをお聴かせなさいまして、御自分を弁えさせられることでございます。矯正なさる時は決して辱かしめたり、懲罰や折檻を加えられてはいけません。大方の若者の気質は手厳しく咎める人をたちどころに憎悪する、と言った具合でございます。とりわけ、由緒ある家柄の子弟ならば恥辱を受けたと思ひ込み、自らの行為が正常ではないことに気が付かないのでございます。つまり彼らは道を踏み外さぬように忠告を与えてくれる親友のいない若者と同類だからでございます。人の言葉を素直に聞き入れるどころか逆恨してしまふのでございます。この点をお心得いただきませんと、おそらく殿とその若君との間にもいずれお互いの心が傷つき合うような憎しみが生じるであらう。」

伯爵はパトロニーオからお受けになられたこの助言にとっても感謝され、その通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談にとっても満足したので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

若者を手厳しく懲らしめるな、

おだやかな口調で説き聞かせよ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第二十二話 「獅子と雄牛に起った事について」

て」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオと話をしておられたが、それはこのような話であった。

「パトロニーオ、予には権勢殊の外高く、いと高貴なる友がある。予は今日迄その友から何かと好意を受けて参つておるが、近頃人の言うには、友は以前ほど予に親しみを覚えておらず、それどころか予を叩き伏せる手だてを探し求めておることだ。予は今二つの理由からとても懸念しておる。一つは、噂が真なれば甚大なる被害が予にもたらされることは必定であることに。他の一つは、予が友に不信の念を抱き、警戒しておることを察知した友が、同じ態度を取れば、われらの疑心や敵意は徐々に大きくなり、行きつくところわれらが敵同士になつてしまうことだ。そこで予がお前に寄せる絶大なる信頼に依つて、この件に関して予が対処するに最もふさわしいと思つてお前の所見を聴かせてくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「かかる事態が引き起します危害から御身をお守り下さいますには、獅子と雄牛に持ち上がりました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「獅子と雄牛は親友でございました。両者は共に並外れて強く、たくましい動物でございましたから、動物界に君臨致しておりました。獅子は雄牛の助力を得て総ての肉食獣を統めておりましたし、雄牛は獅子の後押を受けて総ての肉食獣を支配致しておりました。ですから、他の総ての動物達は獅子と雄牛が互いに協力し合つて自分達を統御していることや、そのために酷い目に会つてゐることは身に泌みて承知しておりました。ですから獅子と雄牛の仲を裂けばこの圧制から解放されることなど百も承知のことでございます。そこで動物達はこぞつて獅子と雄牛の一の寵臣であります狐と羊に、両雄の仲を裂くために是非ともお骨折りをいただきたいと懇願したのでございます。狐と羊は動物達の願が叶うよう尽力することを約束致しました。」

そこで、獅子の相談役にある狐は主君に次ぐ最強にして勇猛な肉食獣の熊に、「雄牛が御主君をやつつける手だてを探してゐるとの噂を以前から耳に致しております。気になりますので、お心置きいただきますして、御主君のお耳にお入れいただきますとうございます」と打ち明けたのでございます。

一方雄牛の相談役にある羊も、肉食獣の中にあつては雄牛に

次いで最強の馬に同じ事を耳打ちしたのでございます。

そこで熊と馬は各々の主君である獅子と雄牛にこの事を伝えますと、両雄はこのような噂を一笑に付したのでございます。

しかし、重臣頭の熊と馬が自分達の仲を裂く魂胆からこのような事を申しておるのでは、との疑念が両雄の脳裏をかすめました。ところが意外にも、獅子と雄牛の胸中にはすでに相手に対する不信の念が芽生えておったのでございます。そこで、両雄は寵臣である狐と羊に相談を持ち掛けましたところ、狐と羊は「熊と馬がさもありませんとばかりにそのような事を申したかも知れません。しかし用心に越したる事は無く、今後相手の言動にはくれぐれも御留意なされて、相手の動向には何時でも対応出来るように備えておかれるのがよろしいのでございます」と応えました。

今や、獅子と雄牛の間には疑心という大きな楔が打ち込まれておりましたから、互いに不信を抱き合っていることは他の動物達にも分りましたので、この機を見逃す手はないとばかりに、「両雄が互いに不信を抱き合っているのは各々の胸中に敵意が秘められているからだ」と、誰はばかることも無く広言し出したのでございます。いよいよ狐と羊は奸臣としての本領を発揮すると、利己にのみ心を配り、主君への忠誠心をなおざりにして、主君の疑念を晴らすどころかせっせと煽り立てました

から、獅子と雄牛はこれ迄の友情は何処へやらすっかり憎悪の囚となったのでございます。これに気付いた他の動物達はここを先途と両雄を焚き付けましたので、とうとう獅子と雄牛は闘いの場に引き摺り出されました。他の動物達は各々の主君に「自分達が後に付いております」と言い置くと、高みの見物を決め込みましたから、損傷するのは獅子と雄牛だけでございました。

さて、闘はこのような結果に終わりました。獅子は雄牛を二度と歯向えないほどたたき伏せると、その力と威信を著しく失墜させたのですが、自らのも弱まったために以後二度と動物界の王者として君臨し、わが物顔に振舞うことは出来なくなったのでございます。これは獅子と雄牛が互いに同盟を結び、助け合っただけで来たことで総ての動物の畏敬を得、彼らの上に君臨していたことを悟らなかつたためであり、また互いの友情を永続させることが出来なかつたことに加えて、他の動物達が自分達の支配から脱け出し、さらに威力を弱めんとするために繰り出す虚言を意に介したために、互いに争う羽目に陥ったからでございます。つまり、自分達が支配して来た動物達に翻弄された挙句に、もはや彼らをわが物顔で扱うことが出来なくなつたのでございます。

ルカノール伯爵様、殿に御友人を疑わせようとなさる方々

は、狐と羊が獅子と雄牛に及ぼしましたのと同じ結果を引き起そうとの魂胆から、噂を立てているのではないことをお心置き下さい。そこで私は殿に御忠告申し上げます。御友人が誠実で、常に行い正しいお方であり、殿は御子息か御兄弟のように御友人を信頼なさっておられますならば、御友人に対する陰口などは真に受け留められるべきではなく、むしろお聞き及びになられました事を直接お話しなさることでございます。さすれば御友人も殿のことで耳になさいました事は、すぐさまお知らせ下さるであります。その上で、何人も敢えて再びこのような事を行わぬよう卑劣な手段を企む輩に懲罰を加えられることでございます。しかしながら御友人が申し上げましたようなお人柄ではなく、日和見で無節操なお方であれば、返って疑念や悪意を抱いているなどと痛くも無い腹を探られかねませんので、そのようなお方には口を噤み、何もしないことを常にお心がけになられました上で、そのお方の多少の過誤は看過なさることでございます。さすれば、前述致しましたような巧みな虚言が因^{もと}で、そのお方と殿との間に不和が生じましても、殿に甚大なる損害を及ぼすような事を御目に触れぬよう意表をついて仕掛けることなどは出来ないのであります。そのような御友人には、殿がそのお方の助力を必要となされていることや、そのお方には殿の加勢が役立つことを次のようなやり方でお悟ら

せになることでございます。一つは、御友人には何かと好意をお寄せになられ、常に好感をお示しなさることでございます。そして訳も無く御友人に疑念を抱かれたり、下心ある者の言葉を信頼なされないことでございます。さらに、御友人の多少の過誤はお見過しになることでございます。二つは、互いに助け合うことの必要性をお悟らせになることでございます。さすればお二人の友情は何時迄も続くことでありましょう。そうなりますと獅子と雄牛が陥りましたあの同じ過を繰り返されることにはございません。」

伯爵はパトロニーオから受けられた助言にとても満足されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので、本書に記させた。そして次のような詩を作った。

虚言を弄する輩の口車に乗って、

有為な友を失うな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

第二十三話 「身を養うために蟻が行っている事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオとこのような話をしておられた。

「パトローニオ、有難きことに、予は富には十分恵まれておる。そのためにか人はこのような事を勧めるのだ。「貴方にはおやりになれる余裕があるのだから、世の煩らわしさに心を留められず、飲食を楽しみ、遊興に心を委ね、のんびりと余生を送られよ。貯も十分おありだし、子にも莫大な財産を残しておられるのだから」と。そこで予はお前の素晴らしい叡智を頼み、予が処すべき身の振方を助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「心楽しくのんびりと余生を過されますのは結構なことでございます。何れに致しましても殿にとりまして最も有為となります事をなされますには、蟻が身を養うために行っております事をお聴きいただけますれば幸でございます。」

すると、伯爵はそれがどのような話であるのかとお訊ねになられたので、パトローニオは語り出した。

「ルカノール伯爵様、申し上げる迄もございませんが、蟻は

非常に小さな生き物でございます。ですから、物事の道理に照らしましても、莫大な貯を持つ必要はございません。ところが殿もお見掛けなさいますように、小麦の刈入時になりますと巢穴から這い出し、麦扱場へ行っては運べる限りの小麦粒を持ち帰り、巢に貯えるのでございます。ところが何故にか、初雨が降った後は必ず小麦粒を巢穴から外へ運び出すものでございすから、「乾す作業なのだ」と世間では申しておりますが、確たる理由を承知致しておる者はおらないのでございます。事実蟻は乾すために行っているのではございません。殿も先刻御承知のように、蟻が小麦粒を最初に巢穴から運び出しますのは、雨の時期となります冬になる頃でございます。もし雨が降る度に毎に外へ運び出して乾すのであれば、それは大変な作業となります。冬でございますから乾すには日が短過ぎますし、太陽が絶えず顔を見せている訳でもございません。

さて、初めて雨が降りますと小麦粒を巢穴から運び出す本当の理由は、額に汗して運び入れた小麦粒を総てそのままの状態ですべて貯えておくためにでございます。これをやっておきませんと、安心して年を越せないからでございます。つまり、雨水が小麦粒を濡らせば発芽を促すことになり、巢穴の中でそのような事態が生じれば、生きて行く糧と致しております小麦粒に、あるうことか自分達の生命を絶たれる危険のあることを百

も承知致しておりますことから、巢穴の外へ運び出すと小麦粒の芽の芯をひとつひとつ食しては成育出来ない状態にしておくでございます。こうしておきますと、どれほど雨が降りましても再び芽を出すことはなく、一冬中の食糧として貯えておけるからでございます。

また、殿はこのような光景もお見掛けでございます。好天の日になりますと、小麦粒を十分貯えているにも拘らず、蟻が見つけられる限りの草を巢穴へ運び込む作業を飽きずに行っておりますのを。それは貯がまだまだ不十分であると懸念しているからでございます。余裕があっても無為に過したくはなく、それに活用するために神から与えられております時を無駄にはしたくないとの念からなのでございます。

ルカノール伯爵様、非常に小さな生き物でございます蟻でございますも、このような知恵と勤勉の心掛を持ち合せておるのでございます。ですから殿には、何人も、とりわけ御身分の高いお方や臣民を統めるお方が貯を食扶持に転用するのは道理の通らぬことである、とお心得いただかねばなりません。たとえ多額の金子の貯がありましても、日々取り崩せば瞬く間に底を突くものでございます。その上、このような暮し振は気力が衰え、活力が減退したという印象を与えることは必定でございます。そこで私の所見を申し上げますと、殿は飽くせくなさらずにのん

びりと余生を送りたいのでございますれば、常に御身分と御面目を損うことの無きよう貯には十二分の御配慮をなさりつつお過しになられることでございます。金子の貯も十二分にあり、御身分や御面目も申し分無い状態にあられますのに、さらに御面目を高められるために貯に手をおつけになられます場合には、尽きることはございません。」

伯爵はパトロニーオから受けられた助言にとっても満足されたので、その通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので本書に記させた。そして次のような詩を作った。

貯を日々の糧に回すな、
野垂れ死にせぬよう額に汗して働け。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……………

注

(13) トレード Toledo—Madrid の南西およそ百軒の所にあり、古都の名にふさわしく西ゴート族がスペインを統治した時代と、十二世紀イスラム教徒の支配から奪回された時の二度にわたって首都となる。アルフォンソ七世が十二世紀にこの地を首都にして

以来、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒が混在してきわめて多彩な独自の文化を生み出す。ドン・ファン・マヌエルの伯父である賢王アルフォンソ十世 Alfonso X el Sabio (1221~84) はトレドの翻訳家グループを宮廷に集めたことから、彼らの活動によりアラビア文化をヨーロッパへ紹介する役目をする。

(14) サンティアゴ—Santiago—Madrid の北西およそ六百軒の所にあり、ガリシア地方の一都市。聖ヤコブの遺体が埋葬された所であり、そのために有名なサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂が建立された。キリスト教徒にとつては、イエルサレム、ローマと並ぶ重要な巡礼地であったので、十世紀頃には西ヨーロッパの道はすべてここに通じていたと言えるくらいである。

(15) タホ川 Tago—トレドの町をほゞ取り囲むような形で大きく蛇行して流れている。トレドの町はタホ川に周囲を侵蝕された台地上にあり、タホ川を頭上にするのは地の底深く潜ったこととなる。

(16) トローサの司教—サンティアゴの大司教からトローサの司教になったのではおかしい感じだが、サンティアゴの場合は教団員が決めたことで、ローマ教皇が認めたものではない。

(17) 城壁破砕機—幾人もの兵がかかって、宙吊りの木材を振り動かす、城壁のある個所に何度もぶつけて城壁を壊す機械。

(18) 攻城櫓—攻撃する城壁よりも背の高い塔のような木製櫓。

(19) 意識不明の状態—テキストでは suava となっている。「汗をかくの意であるが、Bleuca は「死の兆として言っている」と注釈を付しているのでこのように訳した。

(20) "Ubi est thesaurus……"——マタイ伝第六章二十一、ルカ伝第十二章三十四行。

(21) セビーリヤ Sevilla—スペインの南部アンダルシア地方第一の都市。1229年~1248年にかけてイスラム教徒の支配下にあった。スペイン人がこの町を奪回するために行つた戦にまつわるエピソードである。

(22) ドン・フェルナンド Don Fernando—ドン・ファン・マヌエルの祖父である Fernando III el Santo のこと。セビーリヤはこの王の治世の時に奪回される。

(23) ブルゴス Burgos—Madrid の真北およそ二百五十軒の所にある都市。国土回復戦の英雄エル・シッドの出身地でもある。

(24) アランソン河 Arlançon—ブルゴスの町をほゞ東から西へ貫流している。

(25) 鳥の言葉が理解する…占い師—テキストでは agorero となっている。「占い師」といった意味であるが、Bleuca は「鳥の飛び方や鳴き声から将来を判断する者」と注釈を付しているので、ここではこのように訳した。